優秀賞

未来を生きていく

原町第一中学校　二年
津田　有伊飛

「現状に満足しない。」僕たちの年代では、批判的な考えになることがよくあります。だから、もやもやした思いを抱えますよね。でも、僕にとって、この言葉は、満足できないことへの反発ではなく、将来の自分に対して、恥ずかしくない自分でいるための、僕自身との約束のようなものです。

今、学校生活の中で、僕が1番楽しみながら、力を入れていることは部活動です。入学して以来、学校生活の中心と言えるくらい、バドミントン部での活動に熱中しています。入部当初は、何をすればいいのか分からず、先輩や先生の指示に従い行動していました。

でも、ある日、手応えを感じたんです。辛い練習の最中に「楽しい」と思えたことを覚えています。すると、できなかったことがいつの間にかできていて、ラケットを握ったこともない僕が、今では、大会で戦えるようになりました。思い通りにシャトルをラケットに当てたときの「バァン」という音を出せる快感。「行ける。上に行ける。」漠然とした自信のようなものを感じていたのです。

ところが、コロナウイルスが流行したことで、僕の思いが見えなくなったように思います。バドミントン部の活動が大きく変えられてしまったからです。練習時間の短縮。できなくなってしまった練習の数々。今では、マスクを着けた、制限の多い部活動が、当たり前になってしまいました。上手くなりたい僕は、クラブに入って、一生懸命練習を重

ねました。その一方で、体育館での部活の練習時間は、とても短くなりました。今までできたことを、させてもらえない苛立ちを、感じていました。コロナが流行しているとは言え、僕たちの部活動の時間まで奪われるのはあんまりです。

僕の思いとは別に、顧問の先生は、大勢いる部員が効率よく、公平に練習できるように工夫しながら指導してくださいました。先輩方も、自分の技術向上のためだけではなく、後輩のレベルアップのためにも時間を割いてくださいました。

僕は、「現状に満足しない。」ことを、勘違いするところでした。今までは、当たり前すぎて、気にも留めなかった大切なことを見過ごしてしまうところでした。周囲の方々への感謝の思いがなくてはいけないのです。独りよがりの行動では、バドミントンが大好きで、部活動を大切に思う僕の気持ちに反してしまいます。自分が勝ち残るためだけでも意味がない。強ければ、それでいいのではないのです。

皆さんは、コロナ禍の今、人とのつながりに慎重になったり、煩わしさを感じたりしていませんか。僕たちは、学校生活を送るとき、人との関わりを深め、人と協力しあうことの意味を知っていきます。友だちや、同じ目標に向かって進む仲間と互いに成長していくことを、実感できるのが学校であり、自分で選んだ部活動だと思っています。そして、人とつながり、助け合い、高めあえる瞬間は、日常生活の、いろんなところに、宝物として転がっているエピソードの中に隠れているだけです。僕には大きな出来事や、特殊な何かがあるわけではありません。普通の中学二年生です。普通だとは言え、僕と同じ人生を送る人は、一人もいないと思います。だから、僕は僕として、未来を生きていく。僕の生き方を変えていくきっかけとして、大事にしている部活動から宝物を集めます。大げさなようだけど、僕という一人の人間の存在を確認できる場だと思うから。僕を成長させてくれるその場所で貢献できるように、僕は頑張ります。今の僕に、宝物はどのくらい集められたか確認しながら、現状に満足しない向上心をもち続けて前に進みます。